

# 多重ゼータ値の和公式と超幾何微分方程式

近畿大学工学部	青木 貴史	(Takashi Aoki)
近畿大学総合理工学研究科	昆布 康博	(Yasuhiro Kombu)
近畿大学工学部	大野 泰生	(Yasuo Ohno)

## 1 多重ゼータ値の和公式

よく知られたリーマンゼータ関数  $\zeta(z)$  の自然数  $k > 1$  における値  $\zeta(k)$  はリーマンゼータ値と呼ばれる：

$$\zeta(k) := \sum_{m=1}^{\infty} \frac{1}{m^k} = \frac{1}{1^k} + \frac{1}{2^k} + \frac{1}{3^k} + \dots$$

指数  $k$  を多重指数  $\mathbf{k} := (k_1, \dots, k_n) \in \mathbb{N}^n$  に拡張したものを考える。多重指数  $\mathbf{k} = (k_1, \dots, k_n)$  は  $k_1 \geq 2$  であるとき許容的である (admissible) という。許容的な多重指数  $\mathbf{k}$  に対し収束級数の値として多重ゼータ値が定義される：

$$\zeta(\mathbf{k}) := \sum_{\substack{m_1 > \dots > m_n \\ m_1, \dots, m_n \in \mathbb{N}}} \frac{1}{m_1^{k_1} \dots m_n^{k_n}}$$

また、上の定義の方法と異なる、等号付き多重ゼータ値も定義することが出来る：

$$\zeta^*(\mathbf{k}) := \sum_{\substack{m_1 \geq \dots \geq m_n \\ m_1, \dots, m_n \in \mathbb{N}}} \frac{1}{m_1^{k_1} \dots m_n^{k_n}}$$

この 2 種類の多重ゼータ値間には有理数係数の線型関係式がある。例えば、

$$\zeta(3, 2) = \frac{1}{2^{312}} + \frac{1}{3^{312}} + \frac{1}{3^3 2^2} + \dots$$

であるが、

$$\begin{aligned} \zeta^*(3, 2) &= \frac{1}{1^{312}} + \frac{1}{2^{312}} + \frac{1}{2^3 2^2} + \frac{1}{3^{312}} + \frac{1}{3^3 2^2} + \frac{1}{3^3 3^2} + \dots \\ &= \zeta(3, 2) + \zeta(5) \end{aligned}$$

となることが容易に分かる。

多重指数  $\mathbf{k} = (k_1, \dots, k_n) \in \mathbb{N}^n$  について、 $k := k_1 + \dots + k_n$  を  $\mathbf{k}$  の重さ (weight),  $n$  を深さ (depth),  $k_i \geq 2$  なる  $k_i$  の個数  $s$  を高さ (height) と

呼ぶ。重さ  $k$ , 深さ  $n$ , 高さ  $s$  の許容的多重指数全体の集合を  $I_0(k, n, s)$  で表す。また,  $I_0(k, n) := \bigcup_s I_0(k, n, s)$  とおく。

すると, 多重ゼータ値  $\zeta(\mathbf{k})$ ,  $\zeta^*(\mathbf{k})$  それぞれに関する和公式 (Sum formula) が以下で与えられる。

**定理 (和公式)** (i)  $k > n > 0$  なる整数において, 多重ゼータ値  $\zeta(\mathbf{k})$  とゼータ値  $\zeta(k)$  との間に

$$\sum_{\mathbf{k} \in I_0(k, n)} \zeta(\mathbf{k}) = \zeta(k) \quad (1)$$

なる関係式が成立する。

(ii)  $k > n > 0$  なる整数において, 等号付き多重ゼータ値  $\zeta^*(\mathbf{k})$  とゼータ値  $\zeta(k)$  との間に

$$\sum_{\mathbf{k} \in I_0(k, n)} \zeta^*(\mathbf{k}) = \binom{k-1}{n-1} \zeta(k) \quad (2)$$

なる関係式が成立する。

この公式は本質的には A. Granville[1] と D. Zagier[8] が最初に証明し, 多重ゼータ値全体の張る  $\mathbb{Q}$ -代数の構造を研究する上で要となっている定理である。現在までに数通りの別証明が知られている ([4],[6],[7], etc.)。

本稿の目的は微分方程式を用いた別証明を与える事である。

## 2 母関数と微分方程式

まず, パラメーター  $t$  と多重指数  $\mathbf{k} := (k_1, \dots, k_n) \in \mathbb{N}^n$  に対して形式的冪級数

$$K_{\mathbf{k}}(t) := \sum_{\substack{m_1 > \dots > m_n \\ m_1, \dots, m_n \in \mathbb{N}}} \frac{t^{m_1}}{m_1^{k_1} \dots m_n^{k_n}}$$

を考える。多重指数  $\mathbf{k}$  が許容的であるとき  $t$  の冪の各係数は収束し, また右辺は任意の多重指数  $\mathbf{k}$  と  $|t| < 1$  なる  $t$  に対して収束する。さらに, 多重指数  $\mathbf{k}$  が許容的であるとき

$$\lim_{t \rightarrow 1} K_{\mathbf{k}}(t) = \zeta(\mathbf{k})$$

が成り立つ。次に、自然数  $k, n, s$  に対して

$$G_0(k, n, s; t) := \sum_{k \in I_0(k, n, s)} K_k(t)$$

とおき、この  $G_0(k, n, s; t)$  の母関数を

$$\Phi_0(x, y, z; t) := \sum_{k, n, s} G_0(k, n, s; t) x^{k-n-s} y^{n-s} z^{2s-2}$$

により定める。

また、同様にして、

$$K_k^*(t) := \sum_{\substack{m_1 \geq \dots \geq m_n \\ m_1, \dots, m_n \in \mathbb{N}}} \frac{t^{m_1}}{m_1^{k_1} \dots m_n^{k_n}},$$

$$G_0^*(k, n, s; t) := \sum_{k \in I_0(k, n, s)} K_k^*(t),$$

$$\Phi_0^*(x, y, z; t) := \sum_{k, n, s} G_0^*(k, n, s; t) x^{k-n-s} y^{n-s} z^{2s-2}$$

と定める。

**命題** (i) 母関数  $\Phi_0$  は微分方程式

$$t(1-t)\Phi_0'' + \{(1-t)(1-x) - yt\}\Phi_0' + (xy - z^2)\Phi_0 = 1 \quad (3)$$

を満たす。逆にこの微分方程式の  $t=0$  における正則解で  $\Phi_0(x, y, z; 0) = 0$  となるものは  $\Phi_0$  に限る。

(ii) 母関数  $\Phi_0^*$  は微分方程式

$$t^2(1-t)\Phi_0^{*''} + t\{(1-t)(1-x) - y\}\Phi_0^{*'} + (xy - z^2)\Phi_0^* = t \quad (4)$$

を満たす。逆にこの微分方程式の  $t=0$  における正則解は  $\Phi_0^*$  に限る。

微分方程式 (3) は [6] で与えられた。同様に微分方程式 (4) も導くことができる。

### 3 和公式の微分方程式を用いた証明—概略—

#### 1° 和公式 (i)

$\Phi_0(x, y, z; t)$  にて  $z^2 = xy$  とおいたものを  $\tilde{\Phi}_0(x, y; t)$  で表す: この  $\tilde{\Phi}_0(x, y; t)$  の  $x^{k-n-1}y^{n-1}$  の係数を  $g(t)_{k-n-1, n-1}$  とおくと,

$$\begin{aligned} g(t)_{k-n-1, n-1} &= \sum_s G_0(k, n, s; t) \\ &= \sum_s \sum_{h \in I_0(k, n, s)} K_h(t) \\ &= \sum_{h \in I_0(k, n)} K_h(t) \rightarrow \sum_{h \in I_0(k, n)} \zeta(h) \quad (t \rightarrow 1) \end{aligned}$$

となり, これは和公式 (i) の左辺である.

ところで微分方程式 (3) にて  $z^2 = xy$  とおいたもの, つまり  $\tilde{\Phi}_0$  の満たす微分方程式の解で,  $t = 0$  において正則な解  $\tilde{\Phi}_0$  を, 微分方程式を解くことによって求める. 微分方程式の階数を下げるため  $u = \tilde{\Phi}'_0$  とおくと  $u$  に対する微分方程式

$$t(1-t)u' + \{(1-t)(1-x) - yt\}u = 1$$

が得られる. この微分方程式の一般解は

$$u = ct^{-(1-x)}(1-t)^{-y} + \frac{(1-t)^{-y}}{1-x} F(1-x, 1-y; 2-x; t)$$

で与えられるが,  $t = 0$  で正則な解は  $c = 0$  として得られる. 従って

$$\tilde{\Phi}_0(x, y; t) = \frac{1}{1-x} \int_0^t (1-s)^{-y} F(1-x, 1-y; 2-x; s) ds$$

と表される.

その解  $\tilde{\Phi}_0$  の  $x^{k-n-1}y^{n-1}$  の係数  $g(t)_{k-n-1, n-1}$  を計算し  $t$  を 1 に近づけた値を求めたい. その値は, Abel の定理より解  $\tilde{\Phi}_0(x, y; t)$  にて先に  $t$  を 1 に近づけたもの  $\tilde{\Phi}_0(x, y; 1)$  の  $x^{k-n-1}y^{n-1}$  の係数と一致することより求められる.

$$\tilde{\Phi}_0(x, y; 1) = \frac{1}{1-x} \int_0^1 (1-s)^{-y} F(1-x, 1-y; 2-x; s) ds.$$

ここで  $F(1-x, 1-y; 2-x; s)$  は超幾何級数であるが, これを先に項別積分して

$$\tilde{\Phi}_0(x, y; 1) = \sum_{h=0}^{\infty} \frac{1}{(h+1-x)(h+1-y)}$$

と求まり、この  $\tilde{\Phi}_0(x, y; 1)$  の  $x^{k-n-1}y^{n-1}$  の係数を計算すると  $\zeta(k)$  になる。これは和公式 (i) の右辺である。これにより和公式 (i) が示された。

## 2° 和公式 (ii)

$\Phi_0^*(x, y, z; t)$  にて  $z^2 = xy$  とおいたものを  $\tilde{\Phi}_0^*(x, y; t)$  で表す。この  $\tilde{\Phi}_0^*$  の  $x^{k-n-1}y^{n-1}$  の係数  $g^*(t)_{k-n-1, n-1}$  を計算し  $t$  を 1 に近付けた値は和公式 (ii) の左辺  $\sum_{k \in I_0(k, n)} \zeta^*(k)$  である。

微分方程式 (4) にて  $z^2 = xy$  とおいたもの、つまり  $\tilde{\Phi}_0^*$  の満たす微分方程式の解で、 $t = 0$  において正則な解  $\tilde{\Phi}_0^*$  を、微分方程式を解くことによって求める。微分方程式の階数を下げるため  $u^* = \tilde{\Phi}_0^{* \prime}$  とおくと  $u^*$  に対する微分方程式

$$t(1-t)u^{* \prime} + \{(1-t)(1-x) - y\}u^* = 1$$

が得られる。この微分方程式のと一般解は

$$u^* = ct^{-(1-x-y)}(1-t)^{-y} + \frac{(1-t)^{-y}}{1-x-y} F(1-x-y, 1-y; 2-x-y; t)$$

で与えられるが、 $t = 0$  で正則な解は  $c = 0$  として得られる。従って

$$\tilde{\Phi}_0^*(x, y; t) = \frac{1}{1-x-y} \int_0^t (1-s)^{-y} F(1-x-y, 1-y; 2-x-y; s) ds$$

と表される。

その解  $\tilde{\Phi}_0^*$  の  $x^{k-n-1}y^{n-1}$  の係数  $g^*(t)_{k-n-1, n-1}$  を計算し  $t$  を 1 に近付けた値を求めたい。その値は、Abel の定理より解  $\tilde{\Phi}_0^*(x, y; t)$  にて先に  $t$  を 1 に近付けたもの  $\tilde{\Phi}_0^*(x, y; 1)$  の  $x^{k-n-1}y^{n-1}$  の係数と一致することより求められる。

$$\tilde{\Phi}_0^*(x, y; 1) = \frac{1}{1-x-y} \int_0^1 (1-s)^{-y} F(1-x-y, 1-y; 2-x-y; s) ds .$$

ここで  $F(1-x-y, 1-y; 2-x-y; s)$  は超幾何級数であるが、これを先に項別積分して

$$\tilde{\Phi}_0^*(x, y; 1) = \sum_{h=0}^{\infty} \frac{1}{(h+1-x-y)(h+1-y)}$$

と求まり、この  $\tilde{\Phi}_0^*(x, y; 1)$  の  $x^{k-n-1}y^{n-1}$  の係数を計算すると  $\binom{k-1}{n-1} \zeta(k)$  になる。これは和公式 (ii) の右辺である。これにより和公式 (ii) が示された。

## 参考文献

- [1] Andrew Graville, *A Decomposition of Riemann's Zeta-Function*, in Analytic Number Theory, London Mathematical Society Lecture Note Series, **247**, Y. Motohashi(ed.), Cambridge, 1997, pp. 95-101.
- [2] Takashi Aoki and Yasuo Ohno, *Sum Relations for Multiple Zeta Values and Connection Formulas for the Gauss Hypergeometric Functions*, Publ. RIMS, Kyoto Univ., **41**, 329-337 (2005).
- [3] Michel E. Hoffman, *Multiple Harmonic Series*, Pacific Journal of Mathematics, **152**, 275-290 (1992).
- [4] Michel E. Hoffman and Yasuo Ohno, *Relation of Multiple Zeta Values and Their Algebraic Expression*, J. Algebra, **262**, 332-347 (2003).
- [5] Yasuo Ohno, *A Generalization of the Duality and Sum Formulas on the Multiple Zeta Values*, J. Number Theory, **74**, 39-43 (1999).
- [6] Yasuo Ohno and Don Zagier, *Multiple Zeta Values of Fixed Weight, Depth, and Height*, Indag. Mathem., N.S., **12**(4), 483-487 (2001).
- [7] Jun-ichi Okuda and Kimio Ueno, *Relation for Multiple Zeta Values and Mellin Transforms of Multiple Polylogarithms.*, Publ. RIMS, Kyoto Univ., **40**, 537-564 (2004).
- [8] Don Zagier, *Values of zeta Function and Their Applications*, in Proceedings of ECM 1992, Progress in Mathematics, **120**, Birkhäuser, 1994, pp. 497-512.